

Stephen Crane とストーブの効用

飛 弾 知 法

Whilomville Stories は Stephen Crane の最後の作品で 1900 年に死後出版されている。Whilomville (昔の町の意味がある) というのは Crane が創作した架空の町の名前で、彼自身が少年時代を過ごしたことのあるニューヨーク州の Port Jervis の町がそのモデルだと言われている。いわゆる「Whilomville もの」には、Crane の晩年の代表作である *The Monster* なども含まれているが、*Whilomville Stories* には 1899 年の 8 月から翌年の 8 月まで *Harper's New Monthly Magazine* に連載された 13 編の短編小説だけがそのままの配列でまとめられている。物語はちょうど中程に置かれている “The Knife” という牧歌的な作品を除くと、他はすべて Jimmie Trescott という少年が巻き込まれたり、引き起こしたりする事件が中心になっている。それ故、この作品は 20 年後に出た Sherwood Anderson の *Winesburg, Ohio* のように、個々の物語を単独で鑑賞する短編集として読むこともできるし、Jimmie を主人公にした一つの長編小説として定義づけることも可能である。

Jimmie は *The Monster* の冒頭で父親の大事にしていた芍薬の枝を折って以来様々な悪戯を行っている。黒人の Henry Johnson を怪物に変えた Trescott 家の火事もおそらく彼の悪戯が原因であっただろうし、命の恩人の Henry を見世物扱いして仲間に披露したのも彼の悪戯のひとつである。彼はその都度父親から注意されたり、叱られたりしているが、一向にその効き目が表れてくる様子はなかった。それは *Whilomville Stories* においても同じで、ここでも Jimmie と彼の仲間たちは執拗に悪戯を繰り返し、決して懲りることを知らない。その中でも Jimmie の悪戯は群を抜いている。まるで世の子供たちが演じて

見せる悪戯の見本市のようなものだ。しかし Jimmie 本人にとっては、悪戯は自分の立場や誇りを守るためにはどうしても避けることができないような状況から生み出されたものなので、必ずしも悪意に動かされて仕組んだものばかりではない。子供の世界にも大人が顔負けするような厳しいコードが張り巡らされているのである。

Jimmie の悪戯はすでに最初の “The Angel Child” から始まっている。エンジェル・チャイルドというのは、ニューヨークに住む Jimmie の母親の従兄弟の娘で、彼女が自分の家に遊びに来るという話を聞いて、彼は大いに心を弾ませている。彼の気持ちの中には当然のことながら「可愛い女の子には親切であれ」という Tom Sawyer 風の鉄則が染み込んでいた。ところがこの少女 (Crane の派手ずきで放埒な妻と同じ名前の Cora) は王女様気取りで、Whilomville の町に来るなり男の子達を手玉に取っているのである。この Cora が Jimmie に及ぼす影響は甚大である。悪戯ではほかの誰にも遅れを取ることのない Jimmie が、Cora の魅力の虜になって、彼女の機嫌を取り持つために自らが率先して途方もない要求に応じているのだ。そのために町中が大変な混乱に陥るかもしれないなどという考えは、彼の頭には全く浮かんでは来ない。Jimmie と Cora にまつわる話はこの後第3話と第9話にも出て来るが、Jimmie が Cora に振り回されるという話のパターンは最後まで変わらない。

Whilomville Stories は全体としては二つの対立する世界に大別される。その一つはアメリカ文学特有の女性の登場しない「男だけの世界」である。ここではむしろ女の子のいない「男の子だけの世界」と言うべきかもしれない。この世界を扱った作品には、“Lynx-Hunting”, “The Carriage-Lamps”, “The Trial, Execution, and Burial of Homer Phelps”, “The Fight”, “The City Urchin and the Chaste Villagers” などがある。この世界は James Fenimore Cooper の Natty Bumppo の出現以来、アメリカ文学のひとつの原型と目されるようになってきたアメリカン・アダムの世界を思い起こさせる。だが “Lynx-Hunting” の例からも知れるように、Jimmie の時代にはすでに荒野は消滅し、

銃そのものも父親に厳しく管理され、借りた銃で撃った獲物は荒野の野獣であるリンクス(オオヤマネコ的一种)ではなく、牧場で飼育されていた雌牛であった。それに荒野で人生の入門を成し遂げるアメリカン・アダムにはインディアンの Chingachgook や黒人の逃亡奴隷の Jim のような異人種の伴侶が不可欠だが、Jimmie の家で働いている御者の Peter Washington は、狡猾な白人の農夫をも出し抜くような世知にたけた黒人である。それ故、Whilomville の男の子たちの遊びの手本となったのは、この時代好んで読まれていた三文小説で、彼らは Tom Sawyer と同じやり方で、海賊ごっこや西部劇ごっこに興じていたのである。

この「男の子だけの世界」に対するもう一つの世界は、先程の“The Angel Child”の中で見事に対比されていた大人の世界と子供の世界である。この種の作品には他に“The Lover and the Tell-tale”, “Showin’ Off”, “Making an Orator”, “Shame” などがあり、Cora が再登場する第9話の“The Stove”もその中に含まれる。この世界の背景は家庭であり、学校であり、家庭の延長とも言えるピクニックであり、学校の延長である教会の日曜学校などである。これらの世界ではこれもまた Rip Van Winkle の出現以来アメリカ文学のひとつの特色である女権社会の実例が示されている。その典型がこれから取り扱おうとする“The Stove”と題する作品である¹⁾この作品は何故か The Library of America 版ではあまり重要とは思えない他の2編の作品と一緒に削除されているが、Crane の文学の最後を飾るものとして決して見逃すことの出来ない作品である。その理由の一つとして上げられるのが小道具としてのストーブの扱い方である。

Crane の小説では処女作の *Maggie: A Girl of the Streets* (以下 *Maggie*) から遺作となったこの *Whilomville Stories* にいたるまで、ストーブが小道具として繰り返し登場している。家庭が物語の背景となることの多い Crane の小説の中に、暖房や調理には欠かせないストーブが出てくるのは当たり前の話だが、それだけにとどまらず、家庭内の状況とか登場人物の内面を表す手段として用

いられているのではなかろうかと思いたくなるような場面がしばしば出てくる。実際に Chester Wolford は、*The Monster* の中ではストーブが家族に安寧をもたらす役割を果たしていると述べている。

Stove appears three times in *The Monster*, always as symbols of order, especially of a kind of order that symbolizes safety for the group, in this case, a family.²⁾

The Monster はすでに紹介したように、*Whilomville Stories* の前に書かれた中編小説で、おなじ Whilomville の町を舞台に、Jimmie とその両親に訪れた悲劇的な状況を描いている。Trescott 家の黒人の御者である Henry Johnson は、家の息子の Jimmie を火事の中から助け出すが、そのために自らは火傷を負って瀕死の状態になる。Jimmie の父親の Trescott 氏は、息子の命の恩人ということでこの黒人が脳を冒された醜い怪物となるのを承知の上で彼を蘇生させてしまう。Trescott 氏はこの怪物を同じ黒人仲間の Alec Williams にあずけるが、Williams が怪物を家に連れて帰る場面でストーブが初めて登場する。怪物の奇怪な姿を初めて見た Williams の子供たちはそれぞれに悲鳴を上げながらストーブの後ろに避難する。

Six members of the tribe of Williams made a simultaneous plunge for a position behind the stove, and formed a wailing heap.³⁾

だがその次の章で怪物が逃げ出した時、母親は自ら戦きながらも常にストーブの側にいて子供たちを庇護しているのである。

Near the stove a group had formed, the terror-stricken mother, with her arms stretched, and the aroused children clinging frenziedly to her

skirts.⁴⁾

物語は後半に入ると、Williams の小屋から逃げ出した Henry を中心に展開されて、怪物に遭遇した人達の生の体験と、それを聞いた何人かの人達の噂話が交互に繰り返される。怪物の存在が町の人達に脅威を及ぼすようになってくるにつれて、彼らは Trescott 氏に怪物の始末を迫るようになってくる。だが彼は息子の命の恩人である Henry の処遇に関しては決して彼らの要求に屈しようとはしない。そのために彼とその家族は最後には信頼する友人達にも背かれて、孤立無縁の状況に追い込まれることになる。物語の最後の場面は Trescott 家の室内である。

The wind was whining round the house, and the snow beat aslant upon the windows. Sometimes the coal in the stove settled with a crumbling sound, and the four panes of mica flashed a sudden new crimson. As he sat holding her head on his shoulder, Trescott found himself occasionally trying to count the cups. There were fifteen of them.⁵⁾

ここでもストーブが登場する。そのストーブの側のテーブルの上に置かれた 15 個の手つかずのカップの紹介で物語が終結する。この場面でのストーブの使われ方は Williams の家の中とはきわめて対照的である。Williams の家庭ではストーブが家族の結束と安寧を象徴しているのに対して、Trescott 家では空虚さと孤立感をいっそう引き立てているだけである。

“The Blue Hotel” という短編小説を別にすれば、Crane の作品の中でストーブの果たす役割をこれほど明確に指摘したのは、私の知る限り Wolford だけである。だが彼が *The Monster* の中で指摘したストーブの効用は、Crane の作品の中ではしばしば見受けられる光景である。*Maggie* では、ニューヨークのスラム街で遅しく成長してゆく兄と、男にだまされて街の女にまで墮落してゆく妹

の生き方が対照的に描かれているが、彼らの過酷な家庭環境がやはりストーブによって暗示される。この小説の第2章では、兄妹の子供のころの環境が詳細に紹介されている。酔っぱらいの父親とこれまた昼間から酒を飲んで荒れ狂っている母親。このような両親のもとでいつも小さくなって暮らしている子供たち。この場面ではストーブの描写がわずか数ページの内に5回も出てくる。だがそれらは子供達の育成に決して望ましい環境とは言えないにしても、暖を取ったり食事の準備をしたりするきわめて日常的な意味合いしか含んではいない。ところがこの兄妹が成長し、娘の Maggie が兄の友人の Pete に魅せられて、彼の気を引くためにストーブの上の壁にクレトンのたれ布をかけた時から、ストーブそのものが象徴的な意味を持つようになる。このたれ布は母親に引き剥がされ、Pete が来た時にはストーブの火が消えて、蓋のはずれた口からはねずみ色の灰が不機嫌そうに覗いている。

The knots of blue ribbons appeared like violated flowers. The fire in the stove had gone out. The displaced lids and open doors showed heaps of sullen gray ashes.⁶⁾

Maggie が Pete と一緒に最後に家を出た日には、床には瀬戸物のかけらが散らばり、ストーブの足ははずれ、片側に醜く傾いているのである。

Maggie, stading in the middle of the room, gazed about her. The usual upheaval of the tables and chairs had taken place. Crockery was strewn broadcast in fragments. The stove had been disturbed on its legs, and now leaned idiotically to one side. A pail had been upset and water spread on all directions.⁷⁾

Maggie の家出で小説の前半が終了するが、彼女がいなくなってからこの家に

ストーブが登場する場面はまったく見られなくなった。

George's Mother は *Maggie* と同じころ書き始められたようだが、出版は *The Red Badge of Courage* の後になっている。作品の背景は *Maggie* と同じ Bowery のスラムの安アパートで、主題も親子の確執を中心にした家庭劇である。登場人物の性格描写は *Maggie* とは対照的で、とりわけ母親の性格付けには意識的と思われる程に手が加えられている。昼間から酒に溺れて男顔負けの腕力を振るう *Maggie* の母親は、W. C. T. U. (キリスト教婦人禁酒同盟) の活動家で執拗に息子に教会行きを勧める *George* の母親とは極めて好対照をなす。だがそれでいてどちらの母親も宗教的な偽善に毒されているところに Crane の終始一貫した姿勢が窺い知れる。ただ *George's Mother* の方に *The Red Badge of Courage* からのプロットの安易な転用が見られ、それがこの作品の緊張感を削ぐことになったのは致し方のないところだ。ストーブの効用に関して言えば、第2章で息子の帰りを気にしながら一人で夕飯の準備をしている Kelcey 夫人の悪戦苦闘を描くのに効果的だったが、肝心の母親の臨終の場面で、それでなくても盛り上がりの欠けたこの小説の仕上げを飾るには不十分であった。

南北戦争に参加した一人の若い兵士の心理を克明に描写した *The Red Badge of Courage* では、ストーブが、あるいはストーブのイメージが、二箇所だけだがそれぞれ印象的な場面で用いられている。その一つは第1章で自分が最初の戦闘で敵前逃亡をしはしないかという不安に駆られた若者 Henry Fleming が、ただ一人で兵舎の中に入って瞑想を始める場面だ。

A folded tent was serving as a roof. The sunlight, without, beating upon it, made it glow a light yellow shade. A small window shot an oblique square of whiter light upon the cluttered floor. The smoke from the fire at times neglected the clay chimney and wreathed into the room, and this flimsy chimney of clay and sticks made endless threats

to set ablaze the whole establishment.⁸⁾

この部屋の様子は明らかに彼の心的状況を物語っている。屋根代わりに使われているたたんだテントを通して漏れくる黄色い光は、彼の気後れを暗示しているし、ストーブの代用品とも思える粘土と木片で作られた脆い煙突は、彼の内なる危機を予告しているようである。

この物語は Henry が戦場にやって来たところから始まっているので、その中に出てくる平時の出来事はすべて彼の回想場面である。前線からの逃亡中、他の兵士に銃で殴られて頭に傷を負った Henry は、幻覚の中で過去の様々な出来事を思い出す。

Amid it he began to reflect upon various incidents and conditions of the past. He bethought him of certain meals his mother had cooked at home, in which those dishes of which he was particularly fond had occupied prominent positions. He saw the spread table. The pine walls of the kitchen were glowing in the warm light from the stove.⁹⁾

家で母が作ってくれた食事、台所の壁に照り映える暖かいストーブの明かり。Henry は戦争熱に浮かされて母親の反対を押し切って北軍に入隊した。だが軍隊に入るとすぐに自分の想像していた世界とのあまりのギャップの大きさに気付き、母のいる故郷に郷愁を感じるようになる。この小説では母の作ってくれた食事と暖かい家庭のストーブが与えてくれる生の世界は、軍隊と戦場がもたらす死の世界と好対照をなす。ちなみに Henry は次の戦闘で手柄を立て、自他共に英雄気分浸っているが、作者の彼のヒロイズムに対する扱いは終始アイロニカルである。Crane はこの Henry Fleming のキャラクターが余程気に入ったか、あるいは気になったのであろう。その後も “The Veteran” と “Lynx-Hunting” という2つの短編小説の中で繰り返し登場させている。それによる

と、Henry は軍隊生活を軍曹で終えて母親の期待していた通り農園の経営を受け継いでいる。“The Veteran” では彼が家長として立派に天命を全うする姿が厳粛に描かれているのである。

もし *Maggie* と *George's Mother*, それにこの *The Red Badge of Courage* の間に何らかの共通点があるとすれば、主人公たちの置かれた家庭の状況がまず思い浮かぶ。どの家庭でも父親が若死にして母親が大きな影響力を持っているということだ。母親の性格はそれぞれに異なるし、主人公たちの反応も決して一様ではないので、共通の基盤で論じるのは不可能だが、Crane がこの時家族の有り形、とりわけ母と子の問題に真剣に取り組んでいたことだけは十分に推察できる。次作の “The Open Boat” は、この主題を引き継いでいるだけでなく、それをもっと大きな次元の中で捉えようとした作品である。Norman Lavers は Stephen Crane の主要な 3 作品 (*The Red Badge of Courage* と *George's Mother* に “The Open Boat” が加わる) には、「主人公が母親と訣別して個人としての人間形成に至る」という共通のパターンがあることに注目している。

All three of Crane's major works follow, more or less completely, more or less explicitly, and with more or less conscious intention on Crane's part, the same pattern. Stated most simply, the pattern is that of separation from the mother in order to achieve full development as an individual.¹⁰⁾

George Kelcey と Henry Fleming の生き方を比べてみれば分かるように、主人公がおしなべて人間形成に至っているわけではないが、母親から離反し、自分の選んだ道を進んでいるのは、Lavers の指摘している通りである。

“The Open Boat” は作者自身が実際に体験した事件が発端になっている。わずか 10 フィートたらずの小舟に 4 人の男性が乗り組んで、荒波の中を 30 時間

あまり漂流する話である。*The Red Badge of Courage* が戦記文学だとすれば、これは海洋冒険小説ということになるだろう。ここでもストーブが、厳密にはストーブの比喩が、重要な役割を果たしている。Jay Martin は荒波に翻弄される小舟をバスタブに譬えているあの一節を引用して、“The Open Boat” のイメージがドメスティックであることに注目している。

The imagery is domestic: ... Crane remarks of the collective sense of the boat's inadequacy to sustain life; consequently, it will come later to resemble a grave, and perhaps a coffin.¹¹⁾

このバスタブのイメージは次々に襲いかかってくる荒波にもまれていくうちに、「墓」あるいは「柩」のイメージに変えられて行く。この荒波が母親で、転覆の恐怖と戦うボートの4人の男たちにとって、それは母親と訣別するための試練であった、と Lavers は述べているのだ。ボートの4人とは、難波した輸送船の船長とコック、給油係、それに作者自身の分身とも言える通信記者のことである。これらの4人を家族に譬えるなら、船長には母親に責め立てられて自信を喪失した父親の面影がある。だが記者を始めとする他の乗組員の船長に対する信頼は固く、船長も最後には本来の自信を回復し、指揮を取り始めている。そのなかでとりわけ仲間の結束を固めるのに重要な役割を果たしているのがコックである。

“The Open Boat” で使用されているイメージにはドメスティックなものが目立つことは紹介した通りだが、その多くのものがコックと結び付いている。彼は臆病な性格の持ち主らしく、大波が来るたびに悲鳴を上げたり、溜め息をついたりしているが、その反面きわめて楽観的で、懐疑的な通信記者とはいつも対立している。絶望的な状況の中でパイの話を持ち出して給油係の Billie を怒らしているのもこのコックである。彼は少しでも暖を取るために救命帯を体に巻きつけているが、漕ぎ疲れて震えて眠る漕ぎ手には、その姿がストーブの

ように思われたという。

The cook had tied a life-belt around himself in order to get even the warmth which this clumsy cork contrivance could donate, and he seemed almost stovelike when a rower, whose teeth invariably chattered wildly as soon as he ceased his labor, dropped down to sleep.¹²⁾

これまで述べてきたように、Crane の小説では、時には皮肉な扱われ方をすることもあるが、ストーブは家庭の団欒を表す常套手段である。それにこれもこれまでの例からも知れるように、ストーブは食と暖とを与えてくれる生の世界を暗示している。ボートが転覆した時にコックがこの姿のまま荒波の上を漂って、無事岸に辿り着いているのも当然のことであろう。

このコックと対照的なのが給油係だ。4人の中で最も体力に恵まれ、ボートの安全に最も尽力したのは給油係なのに、何故彼だけが溺れ死んでしまったのだろうか。Eric Solomon は、彼が他の3人がボートの中で学んだ“the value of group action”を無視したのがその原因だという。

The oiler dies because he did not retain the lesson of the sea that he learned while in the boat—the value of group action—and because, obeying his own hubris, he deserted the group at the end.¹³⁾

自然の摂理は人間の推理の領域を遙かに越えている。私は給油係の死の原因をSolomonのように一方的に彼の道徳面に求めるつもりはない。だが彼には明らかに自分の体力を過信しすぎたところがあった。ボートが転覆した時、他の3人がいずれも何かにしがみついで漂っていたのに、彼だけは荒海を一気に泳ぎ切ろうとしたところがある。恐らく彼はコックのストーブのような無様な恰好を内心嘲笑っていたことだろう。だが次に登場させる“The Blue Hotel”の例

からも知れるように、誤ったヒロイズムは身の破滅の元である。もし給油係に通信記者の意識の中に目覚めてきたあの仲間の結束に対する信頼の気持ちが少しでもあったら、彼をめぐる状況は大きく変わっていたかもしれない。

“The Open Boat”では、家庭の中で父権を回復した父親と家族間の信頼が確立されるという寓意的な話と並行して、極限状況の中から生存に向けて結束する人間同士の内なる葛藤が見事に描き出されていた。だが“*The Blue Hotel*”では、これらの点に関しては意識的とも思える程に際立って対照的な展開が仕組まれている。Joseph Satterwhiteが、“Actually, ‘*The Blue Hotel*’ is the counterpart of ‘*The Open Boat*’, the theme of which is human understanding and solidarity...”¹⁴⁾と述べているように、前者には後者に見られる登場人物たちの相互の理解と結束が始めから欠けているが、ストーブの扱い一つを見てもそれがよく理解できるのである。“*The Open Boat*”の慎ましさに比べると、“*The Blue Hotel*”ではストーブの存在がいかにこれ見よがしである。ネブラスカのFort Romperという田舎町の駅の近くにあるPalace Hotelという名の宿の小さな一室には、その中央に巨大なストーブが置かれていた。それが神のような勢いで激しく燃え盛っているのです、この部屋はそれに相応しい神殿のようにも見えたという。

The room which they entered was small. It seemed to be a proper temple for an enormous stove, which, in the center, was humming with godlike violence. At various points on its surface the iron had become luminous and glowed yellow from the heat.¹⁵⁾

Palace HotelのあるじはPat Scully。この神殿に仕える“old priest”とも称されている男だ。

吹雪の荒野に放り出されたようなホテルには、大時化の海で翻弄される小舟のイメージがある。いずれも人間が自然の理不尽な攻撃から身を守ることの出

来る唯一の避難場所なのである。だが Palace Hotel のあるじの Scully には、“The Open Boat” の船長にあった状況を冷静に判断する能力と、常に乗組員の気持ちを思いやる優しさが欠けていた。彼は町の他の住民たちを出し抜いて駅の近くにホテルを建て、一儲けを企むような抜け目のない男なのである。彼は家長として家族の者に横暴であるだけでなく、ホテルの宿泊客に対しても我意を押し通すことだけに終始している。その反面、息子の Johnnie は甘やかし放題だし、客の一人に過ぎないスウェーデン人の我が儘には言いなり次第である。ゴォーと唸りを上げる巨大なストーブの周りで繰り広げられるのは、不信と欺瞞の渦巻く醜悪な人間のドラマである。“The Open Boat” も “The Blue Hotel” も最後は一人の人間の死で終わっている。だが前者の給油係の死からは、人間の理解と結束を越えたところで生まれる運命的なアイロニーを痛感させられるのに、後者の場合、スウェーデン人の死によって発かれたものは、人間同士の無理解と潜在的な暴力だけである。

私は先に *The Monster* について論評した時、Alec Williams の家庭では家族の結束と安寧とを象徴していたストーブが、Trescott 家では空虚さと孤立感を強調しているに過ぎない、といったようなことを述べた。この意味では、Trescott 家のストーブは、“The Blue Hotel” の Scully のホテルの巨大なストーブと同じような役割を果たしていると言えるであろう。そう言えば、Trescott には Scully と同じように独断的で傲慢な性格が窺える。この二人は息子をひどくスポイルしているし、誤ったヒロイズムや無理解によって自らの不運を招いている点でも共通している。Crane の初期の作品では、母親の存在感が大きく、逆に父親は、*The Red Badge of Courage* や *George's Mother* のようにすでに死んでいるか、*Maggie* のように生きていたとしてもきわめて影が薄かった。それが “The Blue Hotel” あたりから逆転して、父親の存在がにわかにはクローズ・アップされるようになってきたのである。それを思うといささか妙な具合だが、早世に終わった Crane の作品にこの問題の糸口を見つけ出すのは難しい。いまここで断言できるのは、Crane の作品では母親と父親そのいずれが力を握って

いようとも、健全な家庭環境が物語の背景に用いられるということは殆どなかった、ということくらいである。

ここで話をもう一度 *Whilomville Stories* に戻そう。この作品の中でストーブが登場するのは“*The Lover and the Telltale*”と“*The Stove*”の二つの短編だけである。前者は学校で Jimmie が Cora に恋文を書いているのを盗み見して、それを他の子供たちに吹聴する Rose Goldege という名の女の子の話である。彼女は学校ではいつも休憩時間中も教室に居残って、一人で家庭を切り回していた。机の中を家の中に見立てて、自らがその家の主婦の役割を果たしていたのである。その彼女がなぜ Jimmie の恋文を盗み見して、告げ口したのであろうか。その理由は彼女の置かれた特異な家庭環境にあった。彼女の家庭は女系家族で、夜になるとストーブの周りに集まって母親や他の老嬢たちの話を聴くのが彼女の日課になっていた。だが聴くことはできても口を挟むことは許されなかったので、彼女は耳にした話をいつも自分勝手に解釈していたようである。

It was her life to sit of evenings about the stove and hearken to her mother and a lot of spinsters talk of many things. During these evenings she was never licensed to utter an opinion either one way or the other way. She was then simply a very little girl sitting open-eyed in the gloom, and listening to many things which she often interpreted wrongly.¹⁶⁾

Crane にとってストーブは家庭団欒の象徴である。この Rose という女の子には、盗み見や告げ口は彼女の想像上の家庭を維持していく上で不可欠の手段だったのだ。彼女にはすでに例えば Faulkner の *Absalom, Absalom!* に出てくる Rosa Coldfield のような老嬢の面影が感じ取れるのである。

この Rose の家庭に比べると、Jimmie の両親ははるかに分別のある人たちで

ある。Trescott 氏は *The Monster* においてすでに実証済みのように、強い意志と信念の持ち主だ。 *Whilomville Stories* でも Cora の躰に関しては一貫して批判的だし、Jimmie の悪友である Willie Dalzel に対しても、“I should think those Dalzel people would hire somebody to bring up their child for them.”¹⁷⁾ と言って、その両親を厳しく非難している。ところがこの Trescott 氏でさえも、自分の息子のこととなるとなかなかうまくは行かないようだ。Whilomville の町ではあの Henry Johnson の怪物事件はすでに忘れ去られて、孤立状態に追い込まれていた Trescott 家は再び社会に受け入れられている。Trescott 家では Henry に代わって Peter Washington が馬車の世話をしているが、この Peter が “The Carriage-Lamps” の中であれだけの悪戯を仕出かした Jimmie が何の罰も受けなかったのを知り、“Ump! Ump! Dese yer white folks act like they think er boy’s made er glass.”¹⁸⁾ と言って驚いているくらいだから、それも余程のことである。

Whilomville Stories では話が Trescott 家のことになると、どうしても *The Monster* との比較になってしまう。だが冒頭で紹介した “The Angel Child” や、これから取り上げる “The Stove” という作品では、*The Monster* では見られなかった新たな局面が顔を出してくる。とりわけ後者ではのちに Sinclair Lewis が *Main Street* で描いたような、アメリカの地方都市の俗物根性 (Lewis のいわゆる “village virus” に侵された精神) に対する批判の片鱗が窺えるようになる。“The Stove” では、Trescott 夫妻とその来客によって演じられる大人の世界の愚行が、Jimmie と Cora の悪戯と同時に並行して描かれることによって、尚一層強調されているのである。

“The Stove” の内容は文字通りストーブについての話だ。それも玩具のストーブについての。だが玩具とはいっても本物と同じように銑鉄で出来ていて、旅行カバン程の大きさのある本格的なものである。Whilomville の二度目の訪問に何故かエンジェル・チャイルドの Cora がこのストーブを携えて来たのである。彼女はこれをいつも自分の側において、寝る時にも父親に手伝わせてベッ

ドに運び込んでいる。Jimmie は当初はそれに何の関心も示さなかったが、すぐに彼女の言いなりになって、一緒に料理を作ったりしている。荒涼とした真冬の庭でストーブ遊びに興じているこの二人の子供は、どう見てもまともではない。

ところで Whilomville の町の御婦人方は皆ティー・パーティーにご執心ということだ。パーティーの当日になると、彼女たちは精一杯着飾って会場に現れるが、古いドレスでやって来た者は来なければよかったと後悔し、賞賛の的になっていると感じた者は内心残酷な喜びにひたる。中身の人間は一切問われない。お茶そのものの味もどうでもよいことなのだ。ティーカップの価値、美しさ、珍しさの方が遥かに注目を集めるのである。そのために彼女たちは器の蒐集のみにうつつを抜かすようになり、その評判を気にしてたえず不安に取りつかれている。Main Street において、中西部の田舎の開業医と結婚した Carol Kennicott は、町の有力者の家で開催されたパーティーに初めて出席して、その俗物振りにひどく驚いているが、それとまったく同じような現象がすでにこの Whilomville の町で展開されているのである。Trescott 夫人も御多分にもれずこのお茶会仲間に加わっていた。Cora の母は町の人たちを驚かすような美人だし、父親は名の通った画家なので、彼女はこの機会にパーティーを開催して、評判を高めようとしていたのである。

一方、庭でストーブ遊びをしていた Jimmie と Cora は、雪がひどくなって火が消えかけたので、場所を移動しようとする。二人は次の遊び場所として馬小屋を思い付くが、しかし頑固な Peter Washington がそんなことを認めるわけがない。そこで Cora の提案で場所を地下室に移すことにする。Cora がこれほどまでストーブに執着するのは、告げ口屋の Rose Goldege にとって教室の机がそうであったように、ストーブが彼女の家庭を象徴しているからである。それに Rose が女系家族の中で育って、ゴシップと告げ口が家庭を守る手段だと思いついていたように、Cora はストーブを制する者が家庭を支配するという風にでも考えていたのであろう。ここでもまた女権家族の典型のような彼女の両

親の生活（それはまた Rip Van Winkle の時代から代々にわたって受け継がれて来たものでもある）が、その雛形であったことは言うまでもない。

子供たちが地下室でカブラを焼いている時、階上では大人たちのティー・パーティーが開かれていた。だがカブラをプディングと思い込んでいる彼らのことを子供騙しだと笑ってはいけない。上では虚栄と偏見に満ちた“tea-fighter”たちの葛藤が一層華々しく展開されているのだから。しかもどちらの世界も女性上位である。焼けたカブラの臭いが階上にまで漂ってきた時、Trescott 氏はすぐに Cora の父親を伴って地下室に下りて行く。そして Cora の言いなりになっている Jimmie に階上に上がるように命じると、Cora の父親にも今が絶好のチャンスだと言って、彼女を厳しく折檻するよう促している。だがそれも Cora の母親が下に降りてくるまでの話だ。その後で演じられる母と娘の愁嘆の場面はまさに目を覆うばかりである。さすがの Trescott 氏も徒労と絶望感で天を仰ぐだけだ。最後に彼が呟いた“…we can't live in the cellar. Let's go upstairs.”¹⁹⁾という言葉は、彼自身が階上と地下室の二つの世界の類似性について認めざるをえなかったことを暗に示しているようである。

Maggie はニューヨークのスラム街を背景に環境に翻弄される無知な人達を描いてアメリカ文学史上最初の自然主義的な小説だと言われて来たし、*Red Badge* は戦記ものの体裁を整えているが、実際は一兵士の内面を赤裸々に解明しようとした心理小説でもあった。“The Open Boat”は荒波に漂う小舟の中で極限状況に晒された人間の生態を冷徹な眼で観察する実存主義的な作品だし、“The Blue Hotel”は西部小説のパロディで、人間の傲慢さと無理解が時には大変な悲劇を生むことになるという道徳的な教訓を含んでいる。*The Monster* は *Frankenstein* 以来おなじみの怪奇小説のスタイルを持っているが、ここでは“*The Blue Hotel*”の密室で展開されたテーマが、ニューヨーク州にある架空の地方都市を背景に一段と複雑な形で提示されている。これらの作品にはそれぞれに固有のテーマがあり、それぞれに新たな問題意識が感じ取れるが、今回の私の小論はこれらの作品に共通していると思われるテーマを、ストーブという

小道具を用いて紹介しただけのことにすぎない。

註

- 1) この作品についての論評は、拙著“Stephen Craneの *Whilomville Stories* について——失われた少年時代——”(『言語文化研究』第14巻第1号)と一部重複するところがある。
- 2) Chester L. Wolford, *Stephen Crane: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne Publishers, 1989), p. 48.
- 3) Stephen Crane, *The Red Badge of Courage and Selected Prose and Poetry* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1965), p. 150.
- 4) *Ibid.*, p. 160.
- 5) *Ibid.*, p. 183.
- 6) *Ibid.*, p. 23.
- 7) *Ibid.*, p. 34.
- 8) *Ibid.*, p. 240.
- 9) *Ibid.*, p. 311.
- 10) Norman Lavers, “Order in *The Red Badge of Courage*”, in *The Red Badge of Courage*, Harold Bloom (ed) (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p. 33.
- 11) Jay Martin, *Harvests of Change* (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1967), p. 68.
- 12) Stephen Crane, *op. cit.*, p. 86.
- 13) Eric Solomon, *Stephen Crane: From Parody to Realism* (Cambridge: Harvard University Press, 1967), p. 174.
- 14) Joseph N. Satterwhite, “Stephen Crane’s ‘The Blue Hotel’: The Failure of Understanding,” *Modern Fiction Studies* II (Winter, 1956-57), pp. 238-41.
- 15) Stephen Crane, *op. cit.*, p. 185.
- 16) *The Work of Stephen Crane* V, Wilson Follet (ed) (New York: Russel & Russel, 1963), p. 45.
- 17) *Ibid.*, p. 95.
- 18) *Ibid.*, p. 102.
- 19) *Ibid.*, p. 138.